

1人1台端末の活用による、日常生活の質を向上させる実践事例

学校名	倉敷まきび支援学校	指導者名	宇野、妹尾
実践場面	給食 *授業時間における活用ではないが、本生徒のコミュニケーション場面をとらえて端末活用を行った実践。	単元・題材名	おかわりを伝えよう
学習目標・ねらい	給食のおかわりの時間に、おかわりしたいものを近くにいる教師に伝えることができる。		
対象児童生徒の実態	知的障害部門 中学部 2年		
	・ 3～4文字の身近なもののイラストを見て平仮名や片仮名で書くことができるものがある。 ・ 30程度の具体物を数えることができる。 ・ 平仮名や片仮名は書けるが、単語として活用しにくい。 ・ 困ったときや依頼したいときに、腕を引いて伝えようとする。		
活用の概要			
・ 給食のおかわりの場で「VOCACO」や「かなトーク」のアプリを用いて次に食べたいものを要求する場面を設定した。 ・ 「かなトーク」を使って「ごはん」や「ぎゅうにゅう」等の単語を入力して音声出力後、「VOCACO」の「～をください。」の定型文を選んで音声出力する。2つのアプリを使った音声出力で、文章で相手に要求を伝えるようにしている。 ・ その他、「VOCACO」を用いて、「ありがとうございます。」「はい。」「いいえ。」等の言葉を使ったコミュニケーションをとることもある。			
※実際に活用している様子			
「かなトーク」		「VOCACO」	
			
成果や活用のポイント・課題、改善点等	・ アプリの切り替え等の基本的な操作は一人でスムーズにできるようになり、自分から伝えることができる場面が増えた。 ・ 「かなトーク」アプリは国語、数学で答えを入力して相手に伝えたり、学級活動で発表するときに使用したりと、授業においても単語を入力し、音声出力で相手に伝えるようにしている。 ・ 相手に自分の考えを伝えるために、自発的に「かなトーク」アプリを利用する主体性を育ていけるように、利用できる場면을意図的に設定し活用を促していきたい。		

(R5. 11. 24 提出)